

# アーバンヴィレッジのデザイン方法に関する記号学的研究

大阪芸術大学 建築学科 教授 門内輝行

21世紀の知識社会では、豊かな生命と暮らしの実現をめざして、デザインの概念は①要素のデザインから関係のデザインへ、②つくることから育てることへと大きく拡張することが求められている。この新たなデザイン概念を50年前から持続的に実践してきたプロジェクトに、「アーバンヴィレッジ」として成熟している「ヒルサイドテラス」（設計：槇文彦）がある。

本研究では、①ヒューマンスケールの都市エリアであるアーバンヴィレッジがアーバンデザインの鍵を握ることを明らかにした上で、②ヒルサイドテラスにおける記号現象の多層性を解説するとともに、③類似と差異のネットワーク、時をパラメータとしたデザイン、建築家とクライアントの信頼関係とコラボレーションといったデザイン原理を明らかにし、④21世紀都市の新しいコミュニティを育むアーバンヴィレッジのデザイン方法論について考察した。

## 1. アーバンヴィレッジの概念

研究代表者は複雑系である都市のデザイン方法について、多角的な視点から研究を蓄積している（門内輝行：アーバンデザイン、デザイン学概論、pp.127-145, 2016.4）。特に日本の伝統的街並みの現地調査を行い、その美的秩序を記号論の視点から解明するとともに（門内輝行：街並みの景観に関する記号学的研究、東京大学学位論文、1997.1）、そこで発見した共同体の景観を現代都市の文脈で生成する試みを実践し、「ヒューマンスケールの都市エリア」が今後のアーバンデザインの鍵を握ることを指摘してきた。本研究では豊かな生命と暮らしを育むヒューマンスケールの都市エリアを「アーバンヴィレッジ」と呼び、そのデザイン方法を記号学的な視点から探求することにした。

## 2. ヒルサイドテラスにおける記号現象の多層性

街並みとしてのヒルサイドテラスの評価（門内輝行×槇文彦：街並みとしてのヒルサイドテラス+ウエストの解説、SD、pp.26-33、2001年1月）、ヒルサイドテラス50周年記念事業のオープニング・シンポジウムへの登壇（槇文彦・門内輝行・北川フラム・妹島和世・西沢立衛、2019年11月9日）等を踏まえて、アーバンヴィレッジとしてのヒルサイドテラスの魅力について解説した。

ヒルサイドテラスにはイメージ・雰囲気、物理的な機能・指標的な方向性、象徴的・文化的な意味といった多層に及ぶ記号現象が認められる。棲み心地の良さなどの生存本能によって規定される現象から社会的・文化的要因によって規定される現象までバランス良くデザインされている。そのような豊かな意味を生成するために考案されたとと思われる繰り返し利用されている多様な建築言語を抽出した。

## 3. 類似と差異のネットワーク

研究代表者は日本各地に残る伝統的な街並みの解説を重ねた結果、①有限の要素の組合せから、無限の景観のバリエーションが生成されること、②互いに類似しながら、各々が個性を発揮できるような「類似と差異のネットワーク」が様々なレベルに組み込まれていること、③それが社会・経済・政治・文化・歴史・技術・自然などの多様な文脈を映し出していることを実証してきた。これらの特質は、たいていの現代都市の景観からは失われてしまったものであるが、長い時間をかけて濃密にデザインされてきたヒルサイドテラスには、こうした伝統的街並みに認められる特質が巧みに組み込まれていることを明らかにした。

## 4. 時をパラメータとしたデザイン

ヒルサイドテラスにおける50年以上に及ぶ時間の流れとは、都市や地域の歴史であり、建築家の意識の中での時間の流れであり、その反映としての各フェーズにおける建築の様態の変化でもある。ヒルサイドテラスはこうして時とともに漸進的に成長を遂げてきたアーバンヴィレッジ（集合住居・店舗・文化施設からなるコンプレックス）である。時をパラメータとしたデザインは伝統的集落の熟成した佇まいを醸し出している。ヒルサイドテラスの生成に大きな影響を及ぼしてきた「インクレメンタリズム」（微増主義）に基づくデザイン方法の意義を解明した。

## 5. 建築家とクライアントの長期にわたる信頼関係とコラボレーション

長い歴史をもつヒルサイドテラスには、建築家、クライアント、テナント、居住者、デザイナー、アーティスト、プロデューサーなど多くの人々が関与してきた。特に注目すべきは、建築家とクライアントが長期にわたって強い信頼関係で結ばれ、建築設計、テナント探し、管理運営、文化活動の展開など、あらゆることについて協働してきたことである。アーバンヴィレッジのデザインにはこうした関係主体間の信頼関係とコラボレーションが不可欠であることが分かる。

## 6. モダニズムの建築言語による都市風景の構築

ヒルサイドテラスはモダニズムの建築言語による都市風景の構築をめざすアーバンデザインのきわめて創造的な実験であったと言える。モダニズムの根底にある人間存在の普遍性と地域の固有性（場所性・歴史性）の両立を実現してきたヒルサイドテラスから、現代都市の基礎単位となるヒューマンスケールのアーバンヴィレッジのデザイン方法を学ぶことを通して、21世紀都市におけるアーバンデザインの方法論を構築する多くの手がかりが得られたと考える。